

第 11 回リプロダクション研究会「妊娠期の超音波画像診断（エコー）と社会」／科研費研究「女性に親和的なテクノロジーの探求と新しいヘルスケア・システムの創造」共催

【妊娠期の超音波画像診断（エコー）と社会】

第 11 回リプロダクション研究会では、「妊娠期の超音波画像診断（エコー）と社会」をメインタイトルに開催致します。

エコー（超音波画像診断装置）が日本の産婦人科に普及して 20 年がたった。

現在では胎児の段階で診断がされたり、さらに「胎児治療」まで用途が広がっている。

エコーは医療現場ではもはやなくてはならない道具の一つである。

しかし産婦人科的にも、助産学的にも、妊産婦の認識や行動としても、それは単なる「診断と治療のための道具」だけではない。

妊婦はエコー写真をアルバムにし、胎児が視覚化されることで時には人工妊娠中絶を思いとどまり、医療者も妊婦もエコーのモニターを見ながら「かわいい」と楽しむ。

一方で超音波画像診断装置（エコー）は、企業措置政策として政策的に普及が推し進められ、医療経済の市場拡大に大きく貢献した。行政が補助する妊婦健診にエコーが盛り込まれたことには、どのようなインパクトがあるだろうか。妊婦健診はどのように変わり、妊婦はどのように変容してきたのだろうか。

第 11 回リプロダクション研究会では、妊娠期の超音波画像診断（エコー）の社会的側面について考えたい。